

第60回国立大学図書館協会総会ワークショップA 議事要旨

日 時：平成25年6月20日（木） 15時30分～17時40分
会 場：キャッスルプラザ 4F 鳳凰の間
テ ー マ：図書館機能の高度化のための学内との連携・協働
司 会：引 原 隆 士（京都大学 図書館機構長）
司会補助：栃 谷 泰 文（京都大学 附属図書館事務部長）
記 録：河 野 泰 久（大分大学 研究・社会連携部学術情報課長）
：星 屋 真 （大阪大学 附属図書館利用支援課長）

第1部

【事例報告】

1. 細川聖二 筑波大学 附属図書館 情報サービス課長より、「新研究者情報システム（TRIOS）の構築 ―情報環境機構、研究推進部、附属図書館の連携事業―」と題して事例報告があった。新研究者情報システムが構築される以前は、学内の各システム間の連携が不十分な状態であったが、情報基盤整備の強化を目指す大学の方針の下で、もともと異なる目的で開発された各システムについて部局を超えて共同構築することにより、高次の機能を有する情報システムの開発が実現したとの報告があった。なお、最後に学内の情報システムの連携推進のためには図書館が一定の役割を担う必要があるのではないかとの言及があった。
2. 上原正隆 新潟大学 学術情報部長より、「[外国語自律学習支援のための教育部門との連携](#)」と題して、最初に今年4月に図書館のリニューアルと同時に開設したラーニング・コモンズや自動化書庫等の図書館機能のコンセプトの紹介があり、その後、外国語自律学習支援（FL-SALC）の活動として、英語アドバイザーによる英語カウンセリングや留学生チューターによる英語・ドイツ語・フランス語のチャット教育などの紹介があり、それらを実現するために、教育支援センターや大学教育機能開発センター等とコンタクトをとり、継続した話し合いを通して今回の利用環境の整備に結ぶことが出来たとの報告があった。
3. 瓜生照久 山口大学 情報環境部 学術情報課長より、「[山口大学図書館における学生協働活動](#)」と題して、平成18年4月から始まった学部学生による協働活動の一つとしての図書館サービス向上（破損修理、就活コーナのメンテナンス、企画展示、ミュージアム・ライブラリー連携）を目的としたLA（Library Assistant）について説明があった。図書館職員と協働して図書館サービスを行うことにより、学生のキャリア教育の形成が出来ているが今後検証（PDCA）を行い、より良いものにしていかなければならないとの報告があった。

4. 森いづみ お茶の水女子大学 図書・情報チームリーダーより、「[出る杭を育てる環境が新しい価値を創出する](#) [ーお茶の水女子大学附属図書館と学生・キャリア支援センターの連携を中心にー](#)」と題し、キャリア支援との連携としてキャリアカフェ、キャリア教育との連携としてLiSAプログラム、学生支援との連携として2つのコモンズ(Learning Commons , Student Community Commons)について説明があった。情報基盤センターと連携したラーニング・コモンズの開設を皮切りに、現代G Pや学生支援G Pの実践の場を図書館に積極的に誘致活動を行ったことが現在の連携事業につながっているとの報告があった。最後に何を行うにも人と人の繋がりから始まるとの言及があった。

第2部

【ディスカッション】

引原隆士京都大学図書館機構長を司会者、報告者4名をパネリストとして、図書館機能高度化のための学内との連携・協働についてパネルディスカッションが行われた。

パネリスト及びフロアからの主な質問・意見は次のとおり。

- 共通の目的に向かって異なる部局が動く際にキーとなったのは個人なのか、それとも共通認識のもとに集団として動けたのか。

筑波大（細川）：キーとなったのは、大学全体の情報システムの開発や運用に携わり、また図書館の研究開発室の室員でもある教員で、組織としてはそこまで動けていなかった。

新潟大（上原）：部局長や事務の執行部のレベル等を中心に、いろいろなチャンネルでコンタクトを取った。

山口大（瓜生）：スタート時点では組織的な動きはあまりなかったが、教員等のキーパーソンがいて、そこを拠点に動き出し、人と人を結ぶ線につながった。これを面にすることが課題である。

お茶大（森）：キーパーソンとなる教員がいて、最初は個人的に動いたことが、のちに組織としての取り組みにつながった。

- 学生課、就職支援室などの部署とどのように協力しているのか。

お茶大（森）：企画は学生キャリア支援センターが行っているが、図書館は場を共有して一緒に問題を解決していこうという方向になっている。大学として学生を教育するとはどういうことかを教育担当部門と一緒に考える機会もあり、どのような学修環境を整えたらよいか考える時の大きな指針になると思う。

九州大（吉田）：現代G Pから組織改革が起こったことがきっかけで図書館がその中に関わっていくことになった。

- グローバル人材育成のためにリニューアルされた新潟大のFL-SALCのスペースのレイアウトやデザインは、教員や教育担当部門と一緒に考えたのか。

新潟大（上原）：グローバル人材育成の場として利用されるように、デザイン等はFL-SALCに所属している教員の提案に基づき両者による話し合いによって考えた。

- グローバル化の対応について、「お茶大 二つのコモンズ」の学生寮のコモンズ（SCC）では、留学生の配置はどうしているのか。また、留学生に対する就職支援はどのように取り組んでいるのか。

お茶大（森）：お茶大SCCは日本人学生のみで、別に日本人学生も入ることができる国際寮があり、留学生と日本人学生が交流できるイベントを行っている。留学生への就職支援については今情報がなくて分からない。

- 筑波大の新研究者情報システムについて、外国人教員で日本語が分からない場合の研究業績等の入力に関わる支援、例えば、英語による説明マニュアルや説明会等のグローバル化対応の工夫はどのようにしているのか。

筑波大（細川）：説明会もマニュアルもなしにオープンした。マニュアルがなくても直観的に使えるインターフェースとしたが、今後整備が必要であると認識している。

- 山口大における学生協働交流シンポジウムのテーマはどのように決めているのか。

山口大（瓜生）：4大学の学生と職員がメンバーとなっている実行委員会において学生と職員が共同でテーマ等を決めている。今のところ、図書館との協働ということから図書館と学生協働というキーワードに則ったテーマになっている。

- お茶大のキャリアカフェは就職支援室のキャリアアドバイザーが常駐しているのか。ワークショップ等も図書館の中で行われているのか。

お茶大（森）：週4日午後1時～5時まで、キャリアアドバイザーが常駐している。イベントは図書館で実施することが多いが、規模に応じて共通講義棟等の他の場所でも行っている。

- アクティブ・ラーニングにおいては、コンテンツ・場・スタッフの3つが重要で、それが揃っているのが図書館であるとの話があったが、コンテンツについてはどのようにアクティブ・ラーニングに結びつけていったらよいか。

新潟大（上原）：学生の情報収集の仕方も多様化しており、従来の冊子体に加え、ネットワーク上の電子媒体の資料や、学生同士が話し合う中で産まれる副産物もあり、それに耐える環境整備が必要で、コンピュータをどれだけ提供できるかといったことも重要である。

帯広畜産大（前田）：図書館のコンテンツの利用には教育担当部門との連携が重要であり、きちんとした眼で選ばれた図書館のコンテンツを利用することにより、インターネット上の玉石混交の情報を識別できる眼を養わせるということを、教育のポリシーとして全学的に共有する必要がある。

司会（引原）：学生が玉石混交の情報の中で溺れ、真贋をきちんと識別できなくなっている現状においては、図書館が介在できる可能性は高い。

○報告者からの補足

筑波大（細川）：筑波大でも、学習支援の取り組みとして2年前から院生をラーニング・アドバイザーとして図書館に常駐させ、様々な学習相談に対応しているが、そうした活動を通じて、教育担当部門とは比較的連携しやすい情勢ができつつあるといった感想を持っている。

新潟大（上原）：本日の報告にもあった「コンセプトが変化する」ということを最近つくづく感じている。新潟大でも例えば、交流の場として想定したインフォメーションラウンジが、一面では第二のラーニング・コモンズとして使われ始めており、学生のニーズをどのように把握し、教育部門とどう連携してサービスを向上させていくかが重要である。

山口大（瓜生）：山口大としても、課題をきちんと押さえた上で、ポリシーをつくり、学内コンセンサスを得て、学内的に認知された活動として学生協働活動を進めていきたい。

お茶大（森）：理念を実現するための手段としてさまざまな取り組みを実践しているが、大前提として、教育現場で困っている時に相談してもらえるか、後押ししてくれるトップがいるかということも大事である。

まとめ

司会者から、このディスカッションで結論を出そうというわけではなく、また、一律のプロジェクトが在るわけではないので、今回の事例報告やディスカッションを参考にして検討を進めていただきたい、という趣旨のまとめが述べられ、ワークショップを終了した。